

# 英語 -ing と日本語 -テイルの対照分析

福 嶋 秩 子

## 0. 序

言語学習における転移の重要性があらためて問題となっている。もし転移が重要であるならば、対照分析 (contrastive analysis) も一段と掘り下げた詳しい分析として試みる意味がある。たとえば音韻の対照において既にそのような試みがあるが、この場合一般音声学の枠組みが、対照するときの普遍的な枠組みとして用いられている。しかし、時制 (tense) や相 (aspect) を対照しようとする、その体系は各言語により独特であり比較しにくい。時制や相は動詞の分類と関連していることが多いが、この動詞の分類法も各言語によって異なるからである。本稿では、普遍的な枠組みとなりうる動詞分類法を提案し、それを英語 -ing と日本語 -テイルの対照分析に適用する。

-ing と-テイルはともに動作の継続 (progressive) の意味をもつが、動詞によっては全く違う意味になってしまう。

- 1a. He is reading a book. (彼は本を読んでいるところだ)
- 1b. 彼は本を読んでいる。(He is reading a book.)
- 2a. He is dying. (彼は死にかけている)
- 2b. 彼は死んでいる。(He is dead.)

1a と 1b は継続の例である。同じ意味をあらわしている。2a と 2b は意味が異なる。2a は動作がまだ終了していないが、2b は既に終了して、その結果をあらわしている。

## 1. 伝統文法による動詞の分類

Leech (1971) によれば、英語の動詞は大きく二つに分類される。state verbs

(状態動詞) と event verbs (動作動詞) である。状態動詞はふつう進行形では使われない。動作動詞は次の四類に分けられる。

A. Momentary verbs: hiccough, hit, jump, kick, knock, etc.

進行形で使われた場合、瞬間的な動作が繰り返し行われたことをあらわす。

3. He was nodding. (彼はうなずいていた。)

B. Transitional event verbs: arrive, die, fall, land, stop, etc.

ある状態への推移 (transition) をあらわす動詞であるが、進行形で使われると、「推移の開始 (an approach to the transition)」をあらわす。(上の 2a はこれである。)

4. The train was arriving. (その汽車は到着するところだった。)

C. Activity verbs: drink, eat, play, rain, read, work, write, etc.

単純形では動作をあらわすが、進行形で使われると進行中の未完了の出来事をあらわす。(1a はこれである。)

D. Process verbs: change, grow, mature, slow down, widen, etc.

過程 (process) をあらわす動詞は進行形としてよく使われる。C と同じく、典型的な進行形の用法である。

5. The weather is changing for the better.

(天気がいい方へ変ろうとしている。)

一方、金田一 (1950) は日本語の動詞を四つに分類している。分類基準は-テイルがつくかどうかと-テイルの意味である。

a. 状態動詞: 「ある」「できる」「見える」など。

状態をあらわす動詞で、-テイルはつかない。

6. 彼は泳ぎができる。(He can swim.)

b. 継続動詞：「読む」「書く」「笑う」「泣く」「喋る」「歌う」など。

ある時間内続いて行われる動作、作用をあらわす動詞で、-テイルをつければ、その動作が進行中であることをあらわす。(1b はこれである。)

c. 瞬間動詞：「死ぬ」「終わる」「出発する」「到着する」「結婚する」など。

瞬間に終わってしまう動作、作用をあらわす動詞で、-テイルをつけると、その動作、作用が終わって、その結果が残存していることをあらわす。(2b はこれである。)

d. 第4種の動詞：「そびえる」「すぐれる」「ずばぬける」など。

ある状態を帯びることをあらわす動詞で、-テイルをつけない形は用いられない。

7. 山がそびえている。(The mountain towers above.)

## 2. Vendler の分類とその修正案

上の伝統文法による分類では、日本語と英語で部分的に対応しそうなものもあるが、全体的な対応関係がよくわからない。両方の言語に適用できる普遍的な動詞分類が必要である。この観点から有効と思われるのが、Vendler(1967)の分類である。<sup>\*</sup> 彼は「時間に関する図式 (time schemata)」に基づいて動詞を四つに分類した。分類基準は四つの言語テストであり、その一つは進行形にできるかどうかである。その他の三つは次のそれぞれの文が成り立つかどうかである。

テスト1 : For how long did S V?

テスト2 : How long did it take S to V?

テスト3 : At what moment did S V?

---

<sup>\*</sup> Vendler の論文の存在は W. Jacobsen 教授に指摘された。

こうして、以下の四分類が得られる。四つの言語テストの結果は図1に示す。

- 1) states: ある期間続く出来事 (activity)。例、love (愛する)
- 2) activities: しばらく続くが、決まった時間かかるわけではない出来事。その出来事はどの時間をとってみても等質的である。例、push the cart (車を押す)
- 3) accomplishments: 一定時間かかり、終末 (terminus) にむかって進む出来事。例、draw the circle (円を描く)
- 4) achievements: 瞬時に起こる出来事。例、reach the summit (頂上に着く)

図1 Vendler の四分類

	Prog.	for how long	how long	at what moment
states	-	+	-	-
activities	+	+	-	-
accomplishments	+	-	+	-
achievements	-	-	+	+

図1で、プラスかマイナスかの判断は基本的な意味（たとえば、習慣や反復相、起動相などは除く）について行っている。また、この分類は動詞そのものの分類というより文全体があらわす状況を分類したものであるといえることができる。同じ動詞が状況により二つ以上のクラスに分類されることもある。

ここで、Vendler の分類を修正したい。achievements はテスト2 “how long” の答えに関してマイナスの場合があるので、それを momentary events として独立させ、五分類とする。この結果、achievements と momentary events の定義は次のようになる。言語テストとの関連は図2に示す。

- 4') achievements: 瞬時に起こるが、そこにいたる過程 (process) が考えられる出来事。例、reach the summit (頂上に着く)
- 5) momentary events: 瞬時に起こり、そこにいたる過程は考えられない出来事。例、collide (衝突する) <sup>※</sup>

<sup>※</sup> Carlson も Vendler の achievements を二つのクラスに分類し直している。私の修正案とはほぼ等しいが、分類の基準が異なっている。テスト2にあたる基準を用いず、進行形の可否が achievement と momentaneous (私の momentary events にあたる) を区別する基準となっている。

図2 英語動詞の分類

	Prog.	for how long	how long	at what moment
states	—	+	—	—
activities	+	+	—	—
accomplishments	+	—	+	—
achievements	—	—	+	+
momentary events	—	—	—	+

この分類を日本語にあてはめてみよう。英語の進行形は継続の意味の-テイルに、また他の言語テストも次のようにうつつかえると、図3のようになる。

テスト1：どのぐらい長く……しましたか？

テスト2：……するのにどのぐらい時間がかかりましたか？

テスト3：どの瞬間に……しましたか？

図3 日本語動詞の分類

	-テイル (継続)	ドノグライナガ ク ---シタカ	ドノグライ カカッタカ	ドノシュンカンニ ---シタカ
states	—	+	—	—
activities	+	+	—	—
accomplishments	+	—	+	—
achievements	—	—	+	+
momentary events	—	—	—	+

図2、図3により、日本語と英語の動詞を同じ枠組みで分類することができた。以下では、この枠組みを使って、-ing と-テイルの用法を比較する。

### 3. -ing と-テイルの用法の比較

#### 3.1 states

英語の状態動詞に対応する日本語の動詞は必ずしも状態動詞ではない。結果の意味の-テイルのついた形が対応することがある。シッテイル(know)、モツテイル(have)、スンデイル(live)などがその例である。日本語では、状態がある動作の行われた結果としてあらわされている。

英語の状態動詞は一般に-ing形にならないが、live, sell, wearなどは進行形となって「一時的な状態」を示すことがある。

8. He is living in Niigata now. (彼は今は新潟に住んでいる。)

対応する日本語は-テイル形のみであるので、英語におけるこの意味の区別をあらわすには「今は」「一時的に」などのことばを加えなければならない。尚、このliveなどの進行形の用法は次項のactivitiesを意味する場合と考えられる。

また、日本語には常に-テイルのついた形で使われる動詞(金田一の第4種の動詞)がある。これらは起源的には、結果をあらわす-テイルの用法から発展したものと考えられるが、機能的には状態動詞と同じである。したがって、日本語の状態動詞を二分し、一類を本来の状態動詞に、もう一類を現在の状態をあらわす-テイル形の動詞にあてることが考えられる。

### 3. 2 activities および accomplishments

同じ動詞が使われ方によってactivitiesをあらわしたり、accomplishmentsをあらわしたりする。このルールは日本語と英語についてある程度共通であるので、まとめておきたい。

まず、accomplishmentsになるのは、くぎりのある出来事であることを示しうるような目的語や数量詞とともに使われた場合である。

- |                        |             |
|------------------------|-------------|
| 9a. He ran.            | 彼は走った。      |
| 9b. He ran a marathon. | 彼はマラソンを走った。 |
| 9c. He ran a mile.     | 彼は1マイル走った。  |

9aはactivities、9bと9cはaccomplishmentsである。

次に、限定されていない(non-specific)名詞が目的語となった場合に、出来事の終末がはっきりせずactivitiesとなる。単数と複数の区別のある英語では、複数形の名詞が目的になった場合がそれにあたる。一方、日本語では、数量詞や指示形容詞などで限定されない場合がそうである。



13. 彼はもうその本を見つけている。

(He has already found the book.)

このように「もう」は achievements 的な用法（結果）の指標となっている。

activities および accomplishments の基本的用法（継続）であることを明確に示すには「今」をつければよい。

14. 彼は今その本を読んでいる。(He is reading the book now.)

その他に、数量を示す語句を伴う場合、回数が明記されている場合、過去のある時点に行われたことや特続時間が示されている場合などにも、すでにその出来事が完了しているというニュアンスが出てくるので、結果の用法となる。

15. 彼は本をたくさん読んでいる。(He has read a lot of books.)

16. 彼はその本を一度読んでいる。(He has read the book once.)

17. 彼は1980年にその本を読んでいる。(He read the book in 1980.)

18. 彼は一時間本を読んでいる。

(He has been reading a book for an hour.)

継続動詞の代表として「読む」という動詞をとりあげてみたが、文の中での使われ方により-テイルの意味が異なってくることがわかった。対応する英文における時制、相も進行形、完了形、過去形、完了進行形と様々である。

この他に、accomplishments のみをあらわすことのできる動詞として、過程をあらわす動詞がある。たとえば、change という出来事は過程と到達点からなっていると考えられる。進行形にすると基本的な継続の意味をあらわす。一方、対応する日本語の他動詞カエルは-テイルがつくと継続の意味にも結果の意味にもとることができる(19a)。しかし、自動詞のカワルは、-テイルがつくと、結果の意味でとられるのが普通である(19b)。同じ過程を示す動詞であっても、自動詞か他動詞かによって-テイルの用法に差が出てくるのである。



- 19a. 彼女は服を変えている。  
 (意味① She is **changing** her dress.)  
 (意味② She has **changed** her dress.)
- 19b. 彼女の服が変わっている。  
 (Her dress has been **changed**.)

### 3. 3 achievements および momentary events

achievements や momentary events をあらわす動詞は-ing や-テイルと接続しても、継続の意味ではありえない。それは瞬時に起こる出来事という定義と継続の意味とが矛盾するからである。実際には、-ing は「推移の開始」の意味で使われている。これは、accomplishments における「終末へいたる過程」に相当するものとして、「理論上の過程」が achievements においても考えられるからである。たとえば、到着するためには目的地に接近する過程が考えられる。find, notice など momentary events ではこの過程が考えにくいので、一般的には進行形で使いにくい(例20)。しかし、just をつけると進行形でも使いやすくなる。その一瞬がねらいを定めた感じでクローズアップされているのである。(例21)。この理論上の過程の長さは使われた状況によって異なってくる。22のような例では物をみつけだすときよりもっと長い過程が考えられる。この場合の find はむしろ achievements の例である。

- ? 20. He is finding a book.
21. He is just finding a book.
22. After two high-profile pregnancies, Joan Lunden is now finding motherhood a most happy state of affairs.  
 (MOTHERS TODAY Nov/Dec 1984)

日本語では、-テイルが achievements や momentary events をあらわす動詞と接続すると、すでにある動作が行われ、その結果が残っている状態をあらわす。すなわち結果の意味となる。英語では動作が未完了なのに対し、日本語では完了しているという大きな違いがある。

momentary events をあらかず動詞のうち、連続して起こることが可能な動作をあらかず動詞が進行形になると、-ing の意味は動作の反復を示すことになる。hit はこの意味で進行形になるが、collide は無理である。これは日本語でも同様である。

23. He is hitting the table.

? 24. The car is colliding the wall.

25. 机をたたいている。

? 26. 車がぶつかっている。(衝突が進行中とはとりにくい)

### 3.4 動詞の分類と-ing、-テイルの意味

3.1から3.3までをまとめると、次のようになる。

図4 -ing、-テイルの意味

	-ing	-テイル
states	なし	なし、現在の状態
activities	継続	継続
accomplishments	継続	継続、結果
achievements	推移の開始	結果
momentary events	(点的にとらえた) 推移の 開始、反復	結果、反復

## 5. エラーの予測

図4をもとに、学習の難易が予測できる。日英の一致するところ、たとえば継続、反復の用法は容易に習得できる。一方、不一致の点、たとえば英語における推移の開始、日本語における結果、現在の状態をしめす用法に関連して転移が起こる可能性が高い。

日本語における継続、結果などの意味の区別は一般の話者には意識されていない。したがって、音韻における条件的異音の存在が習得の際の難しさを増すように、無意識に動詞による使い分けがおこなわれていることがこれらアスペクトの習得、理解をさらに難しいものに行しているのである。

## 6. 最後に

-テイルの用法はさらに細かく分けられる。分析をさらに精密にすること、具体的にどういう動詞が入るかを見ていくこと、実際のエラーの分析をしてみるなどが今後の課題である。

ミネソタ大学 Elaine Tarone 教授のもとで書いた論文が本稿のもとになっている。Tarone 教授および Wesley Jacobsen 教授との議論はとても有益なものであった。ここに記して感謝したい。

## 参考文献

- Carlson, L. 1981 Aspect and quantification. In *Syntax and Semantics* vol. 14. New York: Academic press.
- Comrie, B. 1976 *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jacobsen, W. 1979 Transitive verbs, dynamic verbs, and aspect in Japanese. In *Papers from the fifteenth regional meeting of the Chicago Linguistics Society*.
- . 1981 Vendler's verb classes and the aspectual character of Japanese TE-IRU. In *Proceedings of the eighth annual meeting of the Berkeley Linguistics Society*.
- . 1984 Lexical aspect in Japanese. In *CLS Panasession on Lexical Semantics*.
- 金田一春彦 1950「国語動詞の一分類」金田一1976に再掲
- . 1976「日本語動詞のアスペクト」むぎ書房
- Leech, G. N. 1971 *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- Ota, A. 1971 Comparison of English and Japanese with special reference to tense and aspect. *University of Hawaii Working Papers in Linguistics* vol. 3 no. 4.
- Palmer, F. R. 1974 *The English Verb*. London: Longman.
- Soga, M. 1983 *Tense and Aspect in Modern Colloquial Japanese*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- Vendler, Z. 1969 Verbs and times. In *Linguistics and Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.